

先月までの為替相場のレビューと、  
今後の注目の経済指標やイベントを元に、為替相場の展望をお届けします。

2013/06/03

## 金融政策の方向性がカギに

通貨ペア	基調		ページ数
<a href="#">ユーロ/円</a>	➡	方向感定まりづらい 予想レンジ: 126.50~134.00円	2-3
<a href="#">ユーロ/ドル</a>	↘	ユーロ安・ドル高に振れやすい 予想レンジ: 1.2600~1.3250ドル	4-5
<a href="#">ポンド/円</a>	➡	日経平均の下落はどこまで? 予想レンジ: 148.00 ~ 157.00 円	6-7
<a href="#">ポンド/ドル</a>	➡	F O M Cに向けた思惑の変化は 予想レンジ: 1.4850 ~ 1.5600 ドル	8-9

※通貨ペアをクリックすると、そのページにジャンプします



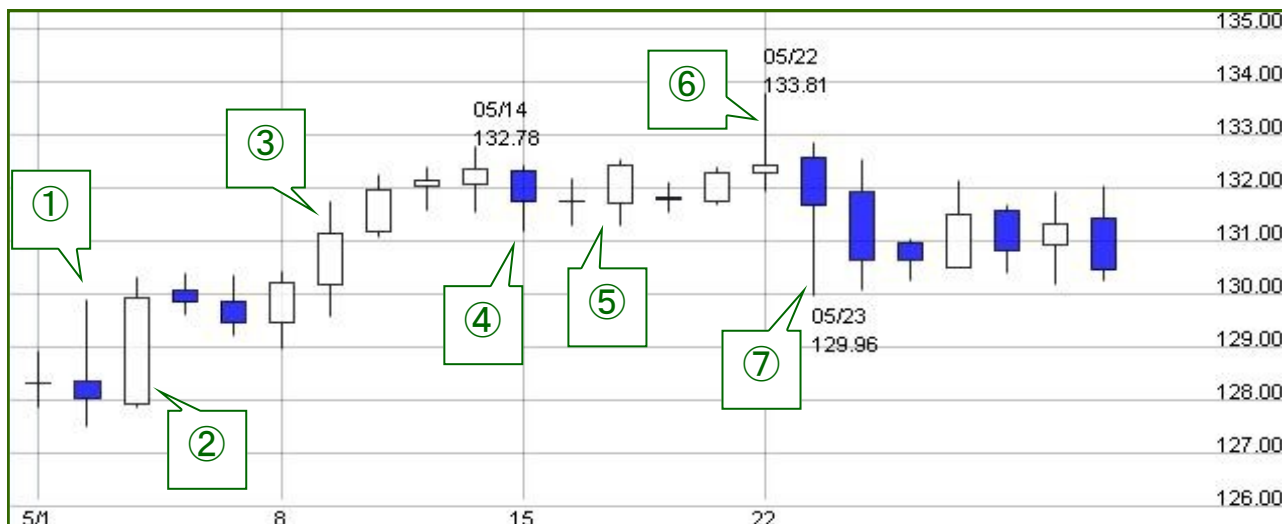
本レポートは、投資判断の参考となる情報の提供を目的としたものであり、投資勧誘を目的として提供するものではありません。投資方針や時期選択等の最終決定はご自身で判断されますようお願いいたします。また、本レポートに記載された意見や予測等は、今後予告なしに変更されることがございます。なお、本レポートにより利用者の皆様に生じたいかなる損害についても、株式会社外為どっとコム総合研究所ならびに株式会社外為どっとコムは一切の責任を負いかねますことをご了承願います。

Copyright©2013 Gaitame.com Research Institute Ltd. All Rights Reserved. www.gaitamesk.com

# EUR/JPY

## ユーロ/円 5月の推移

	始値	高値	安値	終値
四本値	128.31円	133.81円	127.50円	130.46円



①	2日、欧州中銀(ECB)が主要政策金利であるリファイナンスレート <sup>1</sup> を0.25%引き下げて0.50%に、上限貸出金利を0.50%引き下げて1.00%にすると発表(預金ファシリティ金利は0.00%に据え置き)した。ユーロ/円は瞬間的に127円台に下落するも、欧州株が利下げを好感して上昇すると買い優勢に転じ、128円台を回復。その後、ドル/円の上昇につれて129.91円まで大きく上値を伸ばしたが、ドラギECB総裁が定例会見で「景気の弱さは中核国にまで広がっている」「マイナス金利について、予断を持たない」などと発言すると急速にユーロ売りが強まり127.50円まで高値から2円以上も下落した。
②	3日、ノボトニー・オーストリア中銀総裁が「市場は預金金利のシグナルに過剰な解釈をしている」「すぐにマイナス預金金利を実施すると予想せず」などと述べるとユーロ買いが優勢に。米4月雇用統計の好結果を受けてドル/円が上昇した他、NYダウ平均が100ドル超上昇した事も支援材料となり130.34円まで大幅に上値を伸ばした。
③	9日、ドル/円が1ドル=100円の心理的節目を突破してストップロス <sup>2</sup> を巻き込みながら上げ幅を拡大すると、ユーロ/円も131.76円まで大きく上昇した。NYダウ平均が15144ドル台と史上最高値(当時)を更新した事もユーロ高・円安を支援した。
④	15日、独第1四半期国内総生産(GDP)・速報値が前年比-0.2%と予想(+0.2%)外の減少となり、ユーロ圏のGDPが-1.0%と予想(-0.9%)を下回った事がユーロ売り材料となった。さらに、米経済指標の弱い結果を受けてドル/円が下落した事も重石となり131.18円まで反落した。
⑤	17日、ECBが域内の銀行がマイナスの預金金利に対応可能か確認するために連絡を取っているとの憶測が広がるとユーロ売りが強まる場面も見られたが、売り一巡後はドル/円の上昇やNYダウ平均の上昇につれて132.54円まで反発した。
⑥	22日、米連邦準備制度理事会(FRB)のバーナンキ議長が時期尚早の引き締め <sup>3</sup> に否定的な見解を示すとユーロ高・ドル安が進行。ユーロ/円でもユーロ高に振れると133.81円の高値を付けた。ただ、その後同議長が、数ヶ月以内の資産買入れ縮小の可能性に言及すると急速にユーロ売り(ドル買い)が強まった上、ややタカ派的な内容の米連邦公開市場委員会(FOMC)議事録に反応してNYダウ平均が下落した事を受けてユーロ売り・円買いが強まり132円を割り込んだ。
⑦	23日、本邦10年債利回りが1%まで上昇した事や、中国5月HSBC製造業PMIが悪化した事を受けて日経平均株価が15900円台から14400円台まで急激に下落すると円を買い戻す動きが活発化。さらに夜間取引の日経平均先物が大幅安となるとユーロ/円は130円を割り込み129.96円まで下落した。

巻頭の特記事項を必ずお読みください。

## EUR/JPY

## 今月のポイント

5月のユーロ/円相場は127.50円～133.81円のレンジで推移し、月間の終値ベースでは約1.7%の小幅な上昇(ユーロ高・円安)となった。ドラギ欧州中銀(ECB)総裁によるハト派コメントを受けて急落する波乱のスタートとなったが、主要国で株高が進んだことから円売りが優勢となる中、22日には、2009年1月以来の高値となる133.81円まで上昇した。しかし、円安・株高が進む中で、日銀による大量の国債購入にもかかわらず、本邦10年債利回りが1%台に上昇すると、日経平均株価が急速に値を崩したため、月末にかけて円を買い戻す動きが活発化。ユーロ/円は上旬から中旬にかけての上げ幅を縮小する形で5月の取引を終えた。

6月についても、ユーロ/円相場に明確な方向感を見出す事は難しそうだ。目先の焦点は日本株の動向となるが、日銀が2年後に2%のインフレ目標を達成するために、マネタリーベース(資金供給量)を2倍に増やす「量的・質的緩和」を導入していることから、株価が継続的に下落する事は考えにくく、ユーロ/円に日本株由来の下落圧力がかかり続ける可能性は小さいだろう。ただし、ECBは6日の理事会で何らかの緩和策を講じる可能性があり、一部には中銀預金金利のマイナス化を予想する向きもある。こうした決定があればユーロの下押しにつながりそうだ。例え今回の会合で大規模緩和が見送られたとしても、ドラギ総裁が追加緩和の可能性に言及する事で、市場の緩和観測を繋ぎ止める公算が大きくユーロの上値を抑える事になる。一方で、6月は、ユーロ圏では上半期決算期末となることから、月末にかけてはユーロ圏の投資家による海外投資の巻き戻し(リパトリ)が起きやすい月となる。(神田)

(予想レンジ:126.50～134.00円)

## 今月の注目材料

※発表日時は予告なく変更される場合があります。※予定一覧は信頼性の高いと思われる情報を元にまとめておりますが、内容の正確性を保証するものではありませんので事前にご留意くださいますようお願いいたします。

日付	経済指標、イベント等	日付	経済指標、イベント等
6/3(月)	5月米ISM製造業景況指数	6/19(水)	米FOMC政策金利発表
6/4(火)	4月ユーロ圏生産者物価指数	6/20(木)	6月独PMI製造業・サービス業 速報
6/5(水)	第1四半期ユーロ圏GDP・改定値		6月ユーロ圏PMI製造業・サービス業 速報
	4月ユーロ圏小売売上高		6月ユーロ圏消費者信頼感・速報
	5月ISM非製造業景況指数	6/21(金)	4月ユーロ圏経常収支
6/6(木)	欧州中銀金融政策発表	6/24(月)	6月独IFO景況指数
6/7(金)	5月米雇用統計	6/28(金)	6月独消費者物価指数・速報
6/10(月)	4月本邦貿易収支・経常収支		
6/11(火)	日銀金融政策決定会合(10日～発表)		
6/12(水)	4月ユーロ圏鉱工業生産		
6/13(木)	5月米小売売上高		
6/18(火)	6月独ZEW景況感調査		
6/19(水)	5月通関ベース貿易収支		

巻頭の特記事項を必ずお読みください。

# EUR/USD

## ユーロ/ドル 5月の推移

	始値	高値	安値	終値
四本値	1.3167ドル	1.3242ドル	1.2796ドル	1.2994ドル



①	1日、米4月ADP全国雇用者数が11.9万人増にとどまり予想(15.0万人増)を下回った事を受けてドル売りが強まると1.3242ドルの高値を付けた。しかし、ADP全国雇用者数の弱い結果を受けてNYダウ平均が寄り付きから値を下げた事や、原油や金などの資源価格が下落した事から上げ幅を縮小。その後、米連邦公開市場委員会(FOMC)が金融政策の据え置きとともに発表した声明で、資産買入れについて「規模を拡大、あるいは縮小する用意がある」とした事を受けてユーロ/ドルは1.3168ドルまで急落後に1.3223ドルへ反発する乱高下となった。
②	2日、欧州中銀(ECB)が主要政策金利であるリファイナンスレートを0.25%引き下げて0.50%に、上限貸出金利を0.50%引き下げて1.00%にすると発表(預金ファシリティ金利は0.00%に据え置き)した。ユーロ/ドルは瞬間的に1.3123ドルまで下落するも、欧州株が利下げを好感して上昇すると買い優勢に転じ、1.32ドル台を回復。しかし、米新規失業保険申請件数が32.4万件に減少した事を受けてドル買いが強まった上、ドラギECB総裁が定例会見で「景気の弱さは中核国にまで広がっている」「マイナス金利について、予断を持たない」などと発言すると急速にユーロ売りが強まり、1.3037ドルまで下落した。
③	9日、米新規失業保険申請件数が32.3万件と予想(33.5万件)を下回る好結果となるとドル高が進行。その後、ドル/円が100円を突破してさらにドル高が進んだ影響もあってユーロ/ドルは1.3010ドルまで値を下げた。
④	15日、独第1四半期国内総生産(GDP)・速報値が前年比-0.2%と予想(+0.2%)外の減少となり、ユーロ圏のGDPが-1.0%と予想(-0.9%)を下回った事からユーロ売りが優勢に。さらに、英中銀(BOE)のキング総裁が「英経済にとって景気回復は間近」と発言した事を受けてユーロ売り・ポンド買いが強まるとユーロ/ドルは1.29ドルを割り込み1.2843ドルまで下落した。
⑤	17日、ECBが域内の銀行がマイナスの預金金利に対応可能か確認するために連絡を取っているとの憶測が広がるとユーロ売りが活発化。米5月シガン大消費者信頼感指数・速報値が83.7と予想(77.9)を大幅に上回るとドル高・ユーロ安に拍車がかかり1.2796ドルの安値まで下落した。
⑥	22日、米連邦準備制度理事会(FRB)のバーナンキ議長が議会証言において時期尚早の引き締めにも否定的な見解を示すとユーロ高・ドル安が進行。しかし、議長が証言後の質疑応答で「雇用市場の改善が継続すれば、今後数回の会合で資産購入を縮小する可能性がある」と述べると一転してドル買いに傾斜。米連邦公開市場委員会(FOMC)議事録で、複数のメンバーが「早ければ6月にも債券購入のペースを減少させる必要」と指摘していた事が明らかになるとユーロ/ドルは1.2833ドルまで下落した。

巻頭の特記事項を必ずお読みください。

## EUR/USD

## 今月のポイント

5月のユーロ/ドル相場は1.2796～1.3242ドルのレンジで推移し、月間の終値ベースでは約1.3%の小幅な下落(ユーロ安・ドル高)となった。前月の上昇基調を引き継いで、月初1日には1.32ドル台まで上昇したが、欧州中銀(ECB)による追加緩和示唆がユーロ売りを誘った上、米連邦公開市場委員会(FOMC)による早期の量的緩和縮小観測がドル買い材料となった事から17日には1.28ドルを割り込む軟調推移となった。しかし、下旬にかけては、ユーロに特段の買い材料が出た訳ではないものの、日本株の下落をきっかけに、ドル買いポジションが急速に巻き戻される格好となり、一時1.30ドル台を回復した。

6月は、5月前半の相場展開の手掛かり材料となった欧(ECB)・米(FRB)の金融政策発表に注目が集まろう。6日に定例理事会を行うECBは、何らかの緩和策(中小企業の資金繰り支援策など)を講じる可能性があり、一部には中銀預金金利のマイナス化を予想する向きもある。一方、米国では18-19日のFOMCで量的緩和第3弾(QE3)の縮小を示唆する可能性がある。たとえ両中銀が、具体的に金融政策の方向性を示さなかった場合でも、ECBはインフレと経済見通しを下方修正する可能性が高い一方で、FRBはインフレ見通しはともかく経済見通しを上方修正する可能性が高い事から、ユーロ安・ドル高に振れやすい地合となりそうだ。(神田)

(予想レンジ:1.2600～1.3250ドル)

## 今月の注目材料

※発表日時は予告なく変更される場合があります。※予定一覧は信頼性の高いと思われる情報を元にまとめておりますが、内容の正確性を保証するものではありませんので事前にご留意くださいますようお願いいたします。

日付	経済指標、イベント等	日付	経済指標、イベント等
6/3(月)	5月米ISM製造業景況指数	6/18(火)	6月独ZEW景況感調査
6/4(火)	4月ユーロ圏生産者物価指数		5月米消費者物価指数
	4月米貿易収支		5月米住宅着工件数
6/5(水)	4月ユーロ圏小売売上高	6/19(水)	米FOMC政策金利発表
	5月ISM非製造業景況指数	6/20(木)	6月独PMI製造業・サービス業 速報
	米地区連銀経済報告(ページブック)		6月ユーロ圏PMI製造業・サービス業 速報
6/6(木)	欧州中銀金融政策発表		6月ユーロ圏消費者信頼感・速報
6/7(金)	5月米雇用統計		5月米中古住宅販売件数
6/12	4月ユーロ圏鉱工業生産	6/24(月)	6月独IFO景況指数
6/13(木)	5月米小売売上高	6/25(火)	5月米耐久財受注
6/14(金)	5月米鉱工業生産		4月米S&P/ケース・シラー住宅価格指数
	6月米ミシガン大消費者信頼感指数・速報値		6月米消費者信頼感指数
6/17(月)	6月米ニューヨーク連銀製造業景気指数	6/26(水)	第1四半期米GDP・確報値
6/18(火)	6月ユーロ圏ZEW景況感調査	6/28(金)	6月米シカゴ購買部協会景気指数

## GBP/JPY

## ポンド/円 5月の推移

	始値	高値	安値	終値
四本値	151.33円	156.75円	150.85円	152.58円



①	3日、米4月雇用統計が失業率7.5%(予想:7.6%)、非農業部門雇用者数が16.5万人増(予想:14.0万人増)と、市場予想よりも大幅に良好な結果となったことで、ドル/円が急上昇すると、ポンド/円は154.68円まで連れ高した。
②	8日、独3月鉱工業生産が前月比+1.2%と予想(-0.1%)を大きく上回った上、メルシュ欧州中銀(ECB)専務理事が「ECBはインフレ圧力が出てくれば出口に向かう」「ECBに新たな購入プログラムはない」など、追加緩和に否定的な見方を示したことからユーロ/円が上昇すると、ポンド/円も連れ高した。
③	9日、英3月鉱工業生産、前月比+0.7%(予想:+0.2%)、製造業生産高は前月比+1.1%(同:+0.3%)と大幅に市場予想を上回るとポンドは上昇した。さらにその後、ドル/円がストップを巻き込みながら100.79円まで上値を伸ばすと、ポンド/円も連れて155.80円まで急騰した。
④	13日、ドル/円が前日からのドル買い・円売りの流れを引き継いで102.14円まで上昇すると、ポンド/円は156.75円まで連れ高した。しかし、21時30分に発表された米4月小売売上高が前月比+0.1%と市場予想(-0.3%)に反して良好な結果となったことからドル買いが強まり、ポンド/ドルが急落すると、ポンド/円も値を下げた。
⑤	15日、英中銀のインフレ報告にて、最初の利上げ時期が2016年となっていた(2月報告では2015年だった)ことや、「2013年第3四半期にインフレは3.1%(2月報告では3.2%)のピークに達する」などと記してあった点を受けて初動のポンドは売られたが、「第2四半期のGDP成長率は0.5%(第1四半期は+0.3%)に加速するだろう」との記述があったことで156.46円まで反発した。ただ、その後にキングBOE総裁が「この日最大のニュースは景気見通しに喜ぶべき変更があったこと」としつつも「典型的なりセッションではなかったが、典型的な景気回復ということにもならない」と述べたことでポンドは失速した。
⑥	21日、英4月消費者物価指数(CPI)が前年比+2.4%と市場予想(+2.6%)を下回り、ポンドは下落した。
⑦	22日、英4月小売売上高指数、前月比-1.4%(除自動車燃料)と予想(+0.1%)を下回ったことを受けてポンドは下落するも、その後、他のクロス円が堅調な中で反発。バーナンキFRB議長の証言を受けてドル/円が上昇すると、156.09円まで連れ高した。ただし、その後のFOMC議事録を受けてポンド/ドルが急落すると、ポンド/円も失速した。
⑧	23日、日経平均株価が堅調に始まり、ドル/円が上昇すると154.74円まで値をのばしたが、日経平均がその後大幅安となると、連れて失速。151.78円まで値を下げた。

巻頭の特記事項を必ずお読みください。

## GBP / JPY

## 今月のポイント

5月のポンド/円相場は150.85円～156.75円のレンジで推移し、月間の終値ベースでは約0.8%とわずかな上昇(ポンド高・円安)となった。

5月のポンド/円は、前半は米国の量的緩和(QE)の早期縮小・停止観測が拡がる中で100円を超える大幅上昇となったドル/円に連れて上昇するも、ポンド/ドルではドル高・ポンド安が進んでいたことで伸び悩んだ。さらに後半に入ると大暴落した日経平均株価を受けてドル/円を中心に円が全面的に買い戻される中でポンド/円は失速。月前半の上昇幅をほぼ消す形となった。

6月のポンド/円の鍵は、引き続き日経平均の値動きと、米国で6月18-19日に行われる連邦公開市場委員会(FOMC)に向けたQE縮小観測を軸とする対円、対ポンドでのドルの動きになるだろう。米QE縮小観測が強まったり後退したりする中でドル/円とポンド/ドルが大きく動く場面では、ポンド/円は大きな方向感こそ期待できないが、乱高下する可能性があるため、要注意。日経平均については5月下旬からの日経平均の軟調ぶりが続けば、円高圧力が掛かる。これはポンド/円には押し下げ要因となる。

なお、今月の英金融政策委員会(MPC)については、英中銀(BOE)のキング総裁が出席する最後のMPCであり、政策変更期待は低い。従って、英国の材料を受けたポンド相場の動きは引き続き限られるものとする。ただ、波乱要因として、次期総裁であるカーニー氏の発言には気をつけたい。ハト派と見られるカーニー氏が、ここ最近の底堅い英経済指標などを根拠に政策変更については様子見の姿勢をみせた場合、大きめのポンド高に振れる可能性がある。もちろん、早期の追加緩和に意欲を見ればポンド売り材料視されよう。(ジェルベズ)

(予想レンジ: 148.00～157.00円)

## 今月の注目材料

※発表日時は予告なく変更される場合があります。※予定一覧は信頼性の高いと思われる情報を元にまとめておりますが、内容の正確性を保証するものではありませんので事前にご留意くださいますようお願いいたします。

日付	経済指標、イベント等	日付	経済指標、イベント等
6/3(月)	5月英PMI製造業	6/13(木)	5月米小売売上高
	5月米ISM製造業景況指数	6/14(金)	日銀金融政策決定会合議事要旨 (5月21-22日分)
6/4(火)	5月英PMI建設業		5月米鉱工業生産
6/5(水)	5月英PMIサービス業		6月米シガン大消費者信頼感指数・速報値
6/6(木)	BOE政策金利発表	6/18(火)	5月英消費者物価指数
	5月米ADP全国雇用者数		5月米住宅着工件数
	5月米ISM非製造業景況指数	6/19(水)	5月日通関ベース貿易収支
6/7(金)	5月米雇用統計		FOMC政策金利発表
6/10(月)	4日日經常収支	6/20(木)	4月英小売売上高指数
	4日日貿易収支	6/25(火)	5月米耐久財受注
6/11(火)	3月英鉱工業生産		6月米消費者信頼感指数
6/12(水)	4日日機械受注	6/27(木)	第1四半期英GDP・確報値
	5月英雇用統計		5月米PCEデフレーター

巻頭の特記事項を必ずお読みください。

# GBP/USD

## ポンド/ドル 5月の推移

	始値	高値	安値	終値
四本値	1.5531ドル	1.5605ドル	1.5005ドル	1.5195ドル



- ① 1日、英4月PMI製造業が49.8と市場予想(48.5)を上回った上、前月分も上方修正(48.3→48.6)されたことから、ポンドは上昇。その後発表されたFOMC声明にて「少なくとも失業率が6.5%を上回り、今後1-2年のインフレが2.5%を上回らないと予想される限り、FF金利の誘導目標を0.0%から0.25%の範囲に維持することを決めた」「雇用市場の見通しやインフレの変化に応じて、適切な政策緩和を維持するため、資産購入のペースを増加または減少させる用意がある」などとの見解が示されるとドルが乱高下する中でポンド/ドルは1.5605ドルまで一時値を伸ばした。
- ② 9日、英3月鉱工業生産、前月比+0.7%(予想:+0.2%)、製造業生産高は前月比+1.1%(同:+0.3%)と大幅に市場予想を上回るとポンドは上昇。しかし、米新規失業保険申請件数が32.3万件と予想(33.5万件)より強い内容となり、米国債利回りが上昇。これを受けてドル買いが強まると、ポンド/ドルは軟化。NY市場終盤にはストップロス巻き込みながら1.5424ドルまで値を下げた。
- ③ 10日、ハト派で知られる米連邦準備制度理事会(FRB)のバーナンキ議長が講演にて金融政策について言及しない中で米長期金利が上昇すると、全般的にドル高が進行した。
- ④ 13日、米4月小売売上高が前月比+0.1%と市場予想(-0.3%)に反して良好な結果となったことからドル買いが強まり、ポンド/ドルは急落した。
- ⑤ 15日、英中銀(BOE)のインフレ報告において、最初の利上げ時期が2016年となっていた(2月報告では2015年だった)ことや、「2013年第3四半期にインフレは3.1%(2月報告では3.2%)のピークに達する」などと記してあった点を受けて初動のポンドは売られたが、「第2四半期のGDP成長率は0.5%(第1四半期は+0.3%)に加速するだろう」との記述があったことで1.5270ドルまで反発した。ただ、その後にキングBOE総裁が「この日の最大のニュースは景気見通しに喜ぶべき変更があったことだ」としながらも「典型的なリセッションではなかったが、典型的な景気回復ということにもならない」と述べたことでポンドは失速した。
- ⑥ 22日、英4月小売売上高指数は前月比-1.4%(除自動車燃料)と予想(+0.1%)を下回ったことでポンドは下落。その後、バーナンキFRB議長が議会で「次期尚早の引き締めは景気回復の鈍化や終了のリスクに」と証言すると一旦1.5156ドルまで急騰したが、同議長が「雇用市場の改善が継続すれば、今後数回の会合で資産購入を縮小する可能性」等と発言するとQE早期縮小・停止観測が強まったことを受けて再び失速。さらに米連邦公開市場委員会(FOMC)議事録に「複数のメンバーは経済成長が力強く持続的であれば、早ければ6月にも債券購入のペースを減少させる」との文言があったことでこの流れは強まった。
- ⑦ 29日、米長期金利の低下を背景に全般的にドル売りが強まる中でポンド/ドルは反発。1.51ドル台を回復した。

巻頭の特記事項を必ずお読みください。



## GBP/USD

## 今月のポイント

5月のポンド/ドル相場は1.5005ドル～1.5605ドルのレンジで推移し、月間の終値ベースでは約2.2%の下落(ポンド安・ドル高)となった。

5月のポンド/ドルはほとんど米国の要因で動いたと言って良いだろう。英国の各種経済イベントの際には英国の要因でも動いたが、あくまで相場の方向感を左右したのは米国の量的緩和(QE)の早期縮小・停止観測を背景とするドルの動きだった。米国の経済指標に良好な結果が続いた上、米連邦公開市場委員会(FOMC)の中でも比較的ハト派と見られていたメンバーからもQEの早期縮小に理解を示す発言が飛び出し始めたことが大きかったと言える。

6月のポンド/ドル相場も、米国次第の展開となりそうだ。英国については、今月の金融政策委員会(MPC)が英中銀(BOE)のキング総裁が出席する最後の機会になる。つまり、今回慌てて追加緩和にBOEが動く可能性は低く、金融政策変更期待も高まりそうにない。一方、米国については、可能性は高くないとみるのが、6月18-19日の米連邦公開市場委員会(FOMC)での量的緩和縮小を期待する動きも一部に見られている。実際に緩和縮小が決定するかどうかは別として、こうした事前の期待の大きさによって、発表前と発表後のドルの方向感に大きな変化が出てくることは十分に考えられる。良好な米経済指標結果が続けば、QE 6月縮小観測を絡めながらドル高が大きく進む可能性もある。各種経済指標の結果と、その後の相場のムードには要注意だ。

なお、英国については、カーニーBOE次期総裁が英金融政策について発言する機会があれば、その都度ポンドの波乱要因となる可能性がある。就任直後のMPCでの緩和期待が高まるようなら、ポンド安方向に相場が大きく進むことも有り得るため、そうしたムードの転調にも気を配っておきたい。(ジェルベズ)

(予想レンジ: 1.4850～1.5600ドル)

## 今月の注目材料

※発表日時は予告なく変更される場合があります。※予定一覧は信頼性の高いと思われる情報を元にまとめておりますが、内容の正確性を保証するものではありませんので事前にご留意くださいますようお願いいたします。

日付	経済指標、イベント等	日付	経済指標、イベント等
6/3(月)	5月英PMI製造業	6/17(月)	6月米ニューヨーク連銀製造業景気指数
	5月米ISM製造業景況指数	6/18(火)	5月英消費者物価指数
6/4(火)	5月英PMI建設業		5月米消費者物価指数
6/5(水)	5月英PMIサービス業		5月米住宅着工件数
6/6(木)	BOE政策金利発表	6/19(水)	FOMC政策金利発表
	5月米ADP全国雇用者数	6/20(木)	4月英小売売上高指数
	5月米ISM非製造業景況指数		6月米フィラデルフィア連銀景況指数
6/7(金)	5月米雇用統計	6/25(火)	5月米耐久財受注
6/11(火)	3月英鉱工業生産		6月米消費者信頼感指数
6/12(水)	5月英雇用統計	6/27(木)	第1四半期英GDP・確報値
6/13(木)	5月米小売売上高		5月米PCEデフレーター
6/14(金)	5月米鉱工業生産		第1四半期米GDP・確報値
	6月米ミシガン大消費者信頼感指数・速報値	6/28(金)	6月米シカゴ購買部協会景気指数

巻頭の特記事項を必ずお読みください。